

プラスチック資源循環戦略（案）に対する委員御指摘事項

	委員御指摘事項
はじめに	<p>○P1, L10 「日本での有効利用率 84%」には熱回収率が含まれているため、熱回収を外してマテリアルリサイクル 17%、あるいはケミカルも入れて 24%と表記すべき。</p> <p>○「日本の有効利用率 84%」は、プラスチック循環利用協会のフロー図の数字を引用している。この数字は、マテリアルリサイクルとケミカルリサイクルに熱回収も含めた数字であるが、循環基本法に基づく循環利用の定義に即している。基本法においても、「循環的利用の基本原則」の中でその順番が決められており、「技術的、経済的に可能な範囲で」ということである。埋立から脱却している欧州においても、リサイクルよりもリカバリー（熱回収）の方が数字が大きい。温暖化対策との整合性、あるいは資源問題との整合性について、LCA 評価をみても、廃プラの循環利用全体で温暖化対策を進めていく場合、小規模な焼却炉におけるエネルギー効率、発電効率の悪さが一番のネックである。広域化、大規模化でエネルギー効率を上げていくことが、CO2 対策、温暖化対策の意味でも大きい。海洋プラスチック憲章を見ても、リサイクルと熱回収を含むリカバリーということで、2040 年の目標等は設定されており、事務局の原案はその点も踏まえて記載されている。</p> <p>○プラスチック資源循環戦略は、G20 に向けての我が国の大きなインプットであり、「パリ協定の定めている気候変動の長期目標と整合的なものである」ことを、「はじめに」もしくは「基本原則」に記載すべき。環境基本計画の中の諸課題の同時解決の典型的な例であり、この認識を明確に記載しなければ、環境基本計画の重要な柱を体現できないのではないかと。</p>
基本原則	<p>○P2, L21 「3R+Renewable（持続可能な資源）」における「持続可能な資源」は、「再生可能な資源」のことか、それとも「3R+Renewable」のことか。「3R+Renewable」であれば、「持続可能な資源利用」とすべき。</p> <p>○P2, L21 「3R+Renewable（持続可能な資源）」の「(持続可能な資源)」が Renewable の訳でない点は理解したが、「Renewable」であっても使い方によっては「持続可能」でないケースがあり得るので、そのように受け取られることは避けるべき。</p> <p>○P2, L28 基本原則の④「その利用目的から一義的に焼却せざるを得ないプラスチックには、カーボンニュートラルであるバイオマスプラスチックを最大限使用し、」とあるが、いわゆるエセバイオマスプラスチックを流通させないためには、日本バイオプラスチック協会の認証制度を活用するなど、管理・監視体制が必要である。</p> <p>○P2, L29 「循環利用（熱回収によるエネルギー利用を含め）」について、括弧内はすべて削除し、「熱回収に回すプラスチックを段階的に削減」を追加すべき。</p> <p>○基本原則のところで、「3R」と「Renewable」を含めた「持続可能性」という形で、マイクロプラの問題や温暖化の問題などを包含した形で打ち出している点については、今後よりメッセージ性を持った形で打ち出していけばよいのではないかと。</p>
リデュース	<p>○社会で使用されるプラスチックの量をできるかぎり低減していくという究極的な目標も同時に記載すべき。</p> <p>○レジ袋有料化義務化の実現には社会とのコミュニケーションが大事。</p> <p>○マイバックは何 10 回も使わないと効果がない。ライフサイクル思考を消費者に理解してもらう必要がある。</p> <p>○レジ袋有料化義務化は、小規模事業者（メーカー）へのケアが必要。</p>

○ペットボトルは漂着ごみの個数で見ると漁具より多い。ペットボトルの使用削減に向けて、給水器の設置など具体的な策も含めて書き込むべき。軽量化はマイクロプラスチックの問題にとっては逆効果。

○プラスチックの代替素材について検討する際の、LCA 比較などの問題が議論されていない。それぞれの素材に応じて代替していくという方針が重要。

○P3, L32「適切な代替を促進します」について、代替物の環境特性を考慮して代替物を選ぶ必要がある。

○プラスチックの機能を果たすものが他にないからこそプラスチックが使用されてきた経緯を踏まると、特に容器包装の分野においては、代替物がないのであればモノやサービスの提供のあり方まで踏み込む必要がある。

○P3, L23「声かけ」ではなく、簡易包装や包装の削減など、具体的に減らす行動を記載すべき。

○レジ袋無料配布禁止については小規模事業者のケアが重要であり、製造者、販売者含め、幅広い層の意見を聞き、理解を得て進めるべき。また、無料配布禁止による効果として、河川や海洋へ流出するレジ袋の量の変化データを取得し、公表することにより、関係者の理解が深まり、より広い層の協力が得られるのではないかと。

○レジ袋無料配布については、早急に具体的な会議を立ち上げ制度づくりに入るべき。2020の東京オリンピック・パラリンピックまでに少しでもライフスタイルが見直されているよう、まずは東京近辺でスタートして、全国に展開していくという流れもあるのではないかと。

○レジ袋の有料化義務化については、政府、地方自治体が率先して国民理解の醸成に努めるとともに、事業者間の不公平感や消費者の混乱が生じないようにすべき。レジ袋の定義を明確化するなど、全国一律の制度となるよう検討を深める必要がある。

○ペットボトルは、海洋プラスチック問題において重要な要素である。「ペットボトル」も、レジ袋も同様名称として戦略に記載すべき。

○P3, L33「ワンウェイのプラスチック製容器包装・製品」に、「ペットボトル等」を追加し、「マイボトルを普及させる」ことを一つの案として書き込むべき。

○P3, L33「軽量化」について、容器包装の軽量化は海洋プラスチック問題に逆行するものであり、削除すべき。実際の環境中での観測例は少ないが、軽量化・薄肉化によりマイクロプラスチックが増加する可能性が高まるということは、ロジックとして間違っていない。予防原則の観点からも戦略から「軽量化等」を省くべき。

○今後戦略の見直しを行う際には、現時点で薄肉化が即、マイクロプラを増やすというふうには、拙速に結論づけないでいただきたい。

<p>回収・リサイクル</p>	<p>○現行の容器包装リサイクル制度は市民に分かりにくい。早急に見直しに取り掛かってほしい。</p> <p>○製品プラだけ置き去りにしないように。</p> <p>○これまでコストの安さや、場合によっては有価で引き取ってもらえていたので輸出に流れていた。排出事業者に適正なリサイクルには費用がかかることを理解してもらい、費用負担をお願いしていくことが必要。</p> <p>○回収方法の多様化に向けて、廃掃法を見直すべき。</p> <p>○化学物質については、繰り返し循環利用できるようにするということだけではなく、適正な管理を行っていくという内容を強調してもよいのではないか。</p> <p>○有害物質の管理には既存の技術を上手に使っていくということを盛り込んでほしい。</p> <p>○現在のシステムを前提とせず、どういう技術があってどう分別するかを考えるべき。</p> <p>○P4, L28-30「材料リサイクル、ケミカルリサイクル、そして熱回収」について、もっと明確に「材料リサイクルを優先し、次にケミカルリサイクル、それもできない場合は熱回収」と記載すべき。</p> <p>○リサイクルの問題については、昨年度環境省が実施した容器包装と製品プラの一括回収の実証結果を踏まえ、自治体財源が厳しい状況にも配慮しつつ、リサイクルの向上に向けてできるだけ早く一括回収のシステム構築に取り組むべき。</p> <p>○素材産業も拡大生産者責任を負うべきであり、環境配慮設計が必要という点を記載し、相応の役割を担うべき。</p> <p>○熱回収はバックストップテクノロジーとして正しく位置付けるべき。EUの廃棄物処理の優先順位でも熱回収は明確に位置づけられており、3RとWaste hierarchyの優先順を守った上で、バックストップテクノロジーとして、焼却処理と熱回収を適宜位置づけてもらいたい。</p> <p>○エネルギー回収あるいは焼却について、熱回収も含めて100%有効利用を目指すよりも、焼却熱回収にならざるを得ないものについて熱回収効率を向上することの方が低炭素という意味では重要。トータルとして資源消費や温室効果ガス排出削減を目指すべき。</p>
<p>再生材・バイオプラスチック</p>	<p>○「再生材の需要を上げる」点は書いたほうがよい。</p> <p>○再生材利用は新規開拓がないと伸びない。一般に複合素材はリサイクルには不適と言われていたが用途を選べば複合素材でも再生材として使用できるという話も聞いている。</p> <p>○再生材の利用は具体的なデータがないので、まず実態把握を進める必要がある。</p> <p>○バイオプラスチックは、今はコスト面で高く、市民・国民の負担増ということになると抵抗がある。低コスト化を並行して取り組むべき。</p> <p>○レジ袋も最終的にはごみ袋で使用する人が多いので、こういった製品にもバイオマスプラスチックを使うことが望ましい。</p> <p>○P5, L5「再生材・バイオプラスチックの利用促進」について、複合素材は海のプラスチック問題を考える上では重要である。生分解性の高い素材と、そうではないものとの複合素材は避けるべきという点をクリアにすべき。</p> <p>○生分解性とバイオプラスチックをどう考えていくかは重要な問題であるが、通常のプラスチックとそうではないものが混ざった場合、リサイクルできないようでは困る。使い分けや分別回収方法に関する注意深さ（留意点）を記載すべきではないか。</p>

<p>海洋プラスチック対策</p>	<p>○海洋に限定しない「環境中へのプラスチックゼロエミッション」とする（またはそれを追加的に盛り込む）のが適当ではないか。</p> <p>○海洋流出をゼロにしても海洋生物への問題は解決しない。漂流ごみをどう回収するか議論を始めないといけない。</p> <p>○太平洋のごみは、日本のものが多いという調査結果がある。どう回収するか。</p> <p>○不法投棄撲滅は具体的に何をやるか。これまでの延長ではなく質の違う議論をしないとけない。</p> <p>○重量で言うと漁具が半分ぐらいあり、大きな問題。戦略と言う以上そこをカバーする必要がある。</p> <p>○慣行的に、漁が終わったら網をそのまま海に置いてきていると聞く。すぐにでもできることから始めることができるのではないか。</p> <p>○フリース等合成繊維から出るマイクロプラは非常に多く、まだそれほど打ち手が考えられていないと思われる合成繊維もしっかりと対策を出していくべき。</p> <p>○河川には人工芝が多いという調査結果もある。マイクロプラとして注目しなければいけないものがほかにもある。</p> <p>○河川の実態調査をもっと進める必要がある。</p> <p>○P6, L3「マイクロビーズの削減」についてマイクロビーズだけが挙げられているが、「マイクロプラスチック」と総称にすべき。</p> <p>○P6, L3「マイクロビーズの削減」について、なぜ削減ではなく「0」と宣言できないのか。</p>
<p>国際展開</p>	<p>○G20の信頼を得るために、海外への廃棄物の輸出をやめることを書き加えるべき。</p> <p>○東南アジアにおいても、高性能な焼却炉の導入が必要な面があるが、他に有効な手段がないときの最後の順位であることを明記すべき。</p> <p>○国際展開の見出しに資源循環という言葉。</p> <p>○海洋プラスチック問題に効果的に対処するためにも、プラスチックの資源循環に関連する日本の産業の成長戦略としても、国際的な基準づくりや問題対処への協力・連携をはかるプラットフォームとなる多国間の国際枠組みが構築されることが望ましい。日本としてこうした国際枠組みの構築に積極的に関与し、推進していくことを記載すべき。</p> <p>○P6, L18 削減が第一であり、プラスチックを大量消費していないような国では、大量消費されない経済の仕組みを日本が支援すべき。その上で、出てきたプラスチックごみは再使用、リサイクルを基本とし、熱回収は最後の手段とすることを書き込むべき。</p>
<p>基盤整備</p>	<p>○P7, L12-13「資源循環の担い手となる動脈から静脈に渡る幅広いリサイクル・資源循環関連産業の振興・高度化」について、経団連の事例集に動脈産業における取組が記載されているのであれば、その点を記載してもよいのではないか。</p>
<p>マイルストーン</p>	<p>○P9, L2・L6「プラスチック製容器包装」という表現は容リプラを想起させるので避けたほうがよい。</p> <p>○P9, L11「再生利用を倍増」とあるが、再生利用というのはマテリアルリサイクルとケミカルリサイクルを併せて言っていると思うが分かりにくい。</p> <p>○100%有効利用に向けて自治体の施設整備を一層進めないといけない。</p> <p>○中小の町は熱回収できていない。施設の再整備が必要。</p>

○禁輸措置により、安易に熱回収に回さないという意識を企業に持ってもらう必要がある。また、効率向上を促すという意図を盛り込んだ方がよい。

○熱回収は下位にあることを明確に。東南アジアへの展開の際も熱回収が最後だと記載すべき。

○熱回収でも固形燃料と焼却発電では効率が違う。焼却発電には分別できるもの以外のものを回すべき。

○P9, L7「熱回収も含め 100%有効利用」とあるが、熱回収が強調されているような雰囲気を受ける。

○バイオマスプラスチックの導入目標は、非常に野心的なものをさらに超えたような数字ではないかという懸念を持っている。

○国民各界各層が連携協働して取り組んで目指していくものであることを確認するとともに、環境省はぜひリーダーシップを発揮してほしい。

○マイルストーンは目指すべき方向性であり、業種や品目ごとに数値目標を割り当てるといった政策手段を講じる性格のものではなく、事業者や消費者等に達成を義務付けるものではないことを確認したい。

○循環基本法の第三条に「これに関する行動が技術的、経済的な可能性を踏まえて自主的かつ積極的に行われること」とあり、基本理念の一つになっている。これを踏まえ、特定事業者は自主的な取り組みを行ってきており、これを後押しするようなマイルストーンとすべき。

○P8, L29「25%排出抑制」は相対値であり、基準が曖昧になる。これまで国内でリサイクルできず海外に輸出していた 150 万トンという絶対的な数値を目標とすべき。

○P9, L4-5「それが難しい場合にも、熱回収可能性を確実に担保することを目指します」を削除し、「2050 年以降、石油ベースのプラスチックの熱回収が 0 となるよう、焼却炉の段階的な削減を図る」という文言を入れるべき。海洋プラスチック憲章の中には、熱回収と思わせる表現があるが、英語の原文は「Incineration（熱回収）」ではなく「Recoverable」である。削減が先でその後、リユース、リサイクル、それができない場合はリカバーすると優先順位となっている。海洋プラスチック憲章で焼却・熱回収が推奨されているというのは間違った認識である。この点も踏まえ、削除、修正いただきたい。

○一般廃棄物は 8 割焼却しており、焼却のインフラをどうするかという問題は、一般廃棄物処理計画をどう考えていくかという基本的な問題である。焼却炉の削減について本戦略に記載することは難しいのではないか。

○パリ協定では「21 世紀後半は実質的な温室効果ガスの発生をゼロにする」とうたわれており、2050 年には石油ベースのプラスチックを焼却できなくなる。食品残渣が付着しているプラスチックについては、バイオマスベースのものに代替し、燃やしてもカーボンニュートラルになるようにする必要がある。タイムリミットの 2050 年までに素材の改変を進めていくという観点から戦略を考えるべき。

○P9, L7-8「2035 年までにすべての使用済プラスチックを熱回収も含め 100% 有効利用」とは、現実的に回収できるものを最大限回収し、うまく有効利用する（地中に埋蔵しているものや人体に埋め込まれたものは含まれない）という理解でよいか。

<p>全般</p>	<p>○プラスチックの問題は、資源問題、海洋への排出の問題、脱炭素の問題が融合しているが、どういう優先順位で考えたらいいかなど、一般の方には分かりにくい。優先順位をつけて、現状と今後どうしていくかをわかりやすく出す必要があるのではないかな。</p> <p>○世界は3Rではなく Refuse と Repurpose を加えた5R。</p> <p>○主要な製品・排出源ごとに、この戦略で示された目標と基本原則・考え方をふまえた具体的なロードマップ・施策パッケージを検討し、実施していくことが必要である。このことを戦略において明記すべきである。</p> <p>○輸入規制への対応などロードマップや実行計画も併せて検討すべき。</p> <p>○問題の規模、重大性に鑑み、科学的になお説明が必要な事項があるにしても、予防的対応をとることが必要であり、「基本原則」で明記されるべき。</p> <p>○予防原則の観点では、科学的知見が不確実な中でも何らかの対応を検討していく必要がある。</p> <p>○本戦略は、プラスチック資源の問題、海洋プラスチックの問題、温暖化の問題という3つの問題が総合的に扱われているが、区別して考える場合と総合的に考える場合、両方の観点が必要。</p> <p>○手段と目的の対応関係がわからない。どの手段・対策がどの問題に効果的なのかが読み取りにくい。マイクロプラスチック回収による効果と国内の2Rの効果は異なるため、別の目的として進めるべき。海洋への流出対策は、国内対策よりも周辺国の廃棄物管理レベル向上が重要であり、日本の支援が効果的だが、国内で2Rすれば海洋ごみ問題が解決すると誤解されるのではないかな。</p> <p>○「プラスチックの資源循環」と「海洋プラ対策」を大きな2つの柱として分けて記載し、「国際展開」と「基盤整備」という横串をとおした構成は妥当である。</p> <p>○本戦略を実際にどのような法律、施策で展開していくのが極めて重要である。わかりやすく伝え、国民的な運動として広がっていくような施策展開を進めていただきたい。</p> <p>○地球規模の海洋プラスチック問題と国内におけるプラスチック資源循環の推進は、必ずしも同一の課題ではない。それぞれの施策、目的に応じて適切な施策を検討すべき。</p> <p>○戦略策定後の速やかなプロセスが重要である。</p> <p>○戦略策定後、具体的な施策に落とし込む次のステップに関心・懸念を持っている。「おわりに」に、「速やかに具体化を検討・推進する」という文言を入れてもらいたい。文言修正が難しい場合には、戦略採択の際に、今後の検討スケジュールを事務局から出してもらいたい。</p> <p>○P9, L16-17「今後～あらゆる施策を総動員して」について、スケジュール感を教えていただきたい。</p> <p>○戦略では、制度化すべきもの、自主的な取組みとするもの、協働して取り組むもの、国等の予算措置を伴うものなど、様々なものが含まれている。仕分けをしたうえでスケジュール含め、どのように取り組んでいくか示してもらいたい。</p> <p>○P9, L17「あらゆる施策を総動員して」について、誰が何をやるのか、責任が見えにくい。重点的に何を行うのかある程度明確にしておく必要がある。</p> <p>○戦略の概要は、循環型社会の全体の方針を踏まえたうえで、最終的には焼却はしっかり抑制するという意味であると理解しているが、多くの方はまずはリサイクルということに期待している。この点を踏まえ、今後の施策づくりの際には意見交換していただきたい。</p>
------------------	--

- | |
|--|
| <p>○プラスチック全体の戦略の方向性を明確に記載されているが、具体的な施策についてもできるだけ早い段階で議論の場を設けてもらいたい。</p> <p>○パブリックコメント後の委員会において、事務局から具体的な施策の進め方について案をだしていただき、議論する機会を設けるべき。</p> <p>○国民の目線で、難しい言葉がわかりやすい言葉で書かれているかどうか、確認が必要。特に「バイオプラスチック」と「バイオマスプラスチック」は使い分けられているが、脚注に解説を記載するなど配慮が必要。</p> |
|--|